むなかた

師走（しわす） 第682号

目次

3・2 寛仁親王妃信子殿下御参拝
4 古式祭・厄年一覧表
5 神宮神宝より紐解く
6 神宝館だより・造営日記
7 宗像大社歌会詠草
7 御造営奉賛者御芳名

よって、沖ノ島は、豊饒の海に浮かぶ神島である。この神の海域も時代とともに環境変化がすすんできた▼島の縄文遺跡から発見されたアシカの骨や、江戸時代の青柳種信の「瀛津島防人日記」、明治時代の沖津宮社務日誌等で当時の玄界灘の様子が垣間見える▼アシカは明治十六年の日誌に「海獣アシカに鰤網を破られた」とある。島根県竹島では大正の頃まで、アシカ漁が行われており、沖ノ島周辺も同じ様な環境にあったことが窺われる▼鯨も明治の頃までは頻繁に出没していた。明治十二年の日誌には、「午前八時、小屋島の左右に鯨数頭相見え、潮を吹き其の咆哮は雷の如し、又岩の如くして半身を突き出し、鰯を捕り食う状に驚く」と記されている▼古代、沖ノ島の海岸線にはアシカが群れ、沖には鯨などの巨大海洋生物が出没する豊かな海であった事が想像できる。沖ノ島の港内は昭和の時代までカジメなどの海藻が生茂り海底も見えないほどであった。今は磯焼けにより藻場は減少している▼十月、宗像で天皇皇后両陛下をお迎えし「第三十七回全国豊かな海づくり大会」が開催された。豊かな海の恵みに感謝し、守り育て次の世代に繋いでゆかなければならない。（渡）

寛仁親王妃信子殿下御参拝

十一月十七日、午後二時十七分、三笠宮家・寛仁親王妃信子殿下が秋の小春日和の中、当社を御参拝された。

信子殿下は御料車にて神門前に御着され、葦津宮司の先導により本殿へと進み御拝礼の後、儀式殿にて谷井宗像市長、花田宗像市議会議長、宮司と御懇談、幼少時代によく訪ねられていた福津市（旧・津屋崎町）の麻生家の別荘での宗像の思い出話しを懐かしく語られていた。その後、宮司の案内により西日本菊花展の菊を御鑑賞され、三笠宮殿下の昭和五十五年歌会始の沖ノ島の歌碑を御覧。神宝館では一階から三階までの展示品を御視察された。

神宝館では沖ノ島神宝を子細に御覧になり、その精巧な技術に感嘆され、伊勢神宮の御神宝と類似するものがあると、神宮の式年遷宮の技術者の後継者問題に触れられ、日本の伝統技術の継承の重要性にも言及されていた。細部にわたる御観察は、金銅製心葉形杏葉に描かれる鳥人を御自身で見つけられるなど、御質問も多岐に及び、専門的な内容は学芸員が補足説明し、予定の時間を遙かに超えることとなった。

十五時三十分御料車にて御発の際は、奉送者をはじめ参拝者一人一人に丁寧に会釈され、最後まで御料車より手を振り当社を後にされた。

その後は、グローバルアリーナで開催中の「サニックスCUP国際新体操団体選手権」を御視察、ブルガリアやオーストラリアなど八カ国からなる新体操の選手たちによる歓迎エキシビション演技を御鑑賞され、選手たちと交流の後、宗像市を立たれた。

○　○　○

三笠宮家と当大社の由縁は深く、三笠宮崇仁親王殿下には、昭和四十四年、沖津宮、中津宮、辺津宮。昭和五十年には百合子妃殿下とともに辺津宮を御参拝されている。寛仁親王殿下には、昭和五十七年に津屋崎町を訪問された際、当時の宮司が当社に関する御説明を申し上げ、彬子女王殿下には、平成二十五年に辺津宮に御参拝戴いている。

御参拝　御日程

14時17分　神門前御着
14時20分　御参拝（御手水→修祓→御参拝）
14時25分　御休憩（儀式殿）
14時45分　三笠宮殿下歌碑御覧
14時50分　神宝館御覧
15時25分　神宝館御発
15時30分　神門前御発

特別奉送迎者

置鮎玄二郎　花田　鷹人
倉元　亮兒　寺島　俊基
松井　善徳　河辺　紘
谷井　博美　安永　治允

十二月の十五日直近の日曜日、午前六時より辺津宮にて古式祭が斎行される。

古式祭とは、当社を代表する特殊神事で、その年に収穫された作物、ミカンの原種である「九年母（くねんぼ）」や宗像市江口の浜で採れた海藻の「ゲバサモ」などの特殊神饌を神前にお供えし、祭典を行う。その後、神様と同じ食事を皆で頂く「御座（おざ）」（宮座）が行われる。

この神事は室町時代、一條兼良が編纂した『公事根源』に起源を見ることができる。江戸時代には旧暦十一月十五日に行われ、宗像祭と呼ばれていた古来の例祭であった。明治維新の際「民例祭」となるも、明治四十四年、祭日を十二月十五日

古式祭とは何か

とし、名称も「古式祭」と変更された。終戦前後、食料統制の為に中断するが、昭和二十五年から氏子の方々により御座が復活。その折に田島村内を四班（現在は八班）に分け祭当番とし当番班は御座で配膳や調理の奉仕の担当となる。

古式祭の特徴は「特殊神饌」と神人和楽の時を過ごす「御座」にあると言える。秋の新嘗祭に続き、八百年間続く「田島の新嘗祭」といえる古式祭は地元氏子奉仕によるきわめて珍しい神事といえる。

【古式祭　ご案内】

◆祭　典（本　殿）　十二月十七日（日）　午前六時
◆御　座（清明殿）　受付　午前五時三十分
　　御座　午前六時三十分
　（一番座＝五十名ずつ、最大六番座まで）
◆御　座　料　一人…1、000円

平成30年　厄年一覧表

生まれ年	厄年齢（数え）		生まれ年	厄年齢（数え）	
昭和3年	八方塞	91	昭和57年	大厄（女）八方塞	37
昭和12年	八方塞	82	昭和58年	前厄（女）	36
昭和21年	八方塞	73	昭和60年	後厄（女）	34
昭和30年	八方塞	64	昭和61年	大厄（女）	33
昭和32年	後厄（男）	62	昭和62年	前厄（女）	32
昭和33年	大厄（男）	61	平成3年	八方塞	28
昭和34年	前厄（男）	60	平成5年	後厄（男）	26
昭和39年	八方塞	55	平成6年	大厄（男）	25
昭和48年	八方塞	46	平成7年	前厄（男）	24
昭和51年	後厄（男）	43	平成11年	後厄（女）	20
昭和52年	大厄（男）	42	平成12年	大厄（女）八方塞	19
昭和53年	前厄（男）	41	平成13年	前厄（女）	18
昭和56年	後厄（女）	38	平成21年	八方塞	10

※厄年のお祓いは年始から節分までに行なうのが良いとされています。

厄　年

人生の節目であるとともに、一生のうちで災難、『厄』にあう恐れが多いため、慎まねばならない年です。特に男性の42歳、女性の33歳は『大厄』とされています。

八方塞（はっぽうふさがり）

男女の別なく九星（星回り）にもとづいて災難に遭いやすいとされる年です。

神宮神宝より紐解く 4

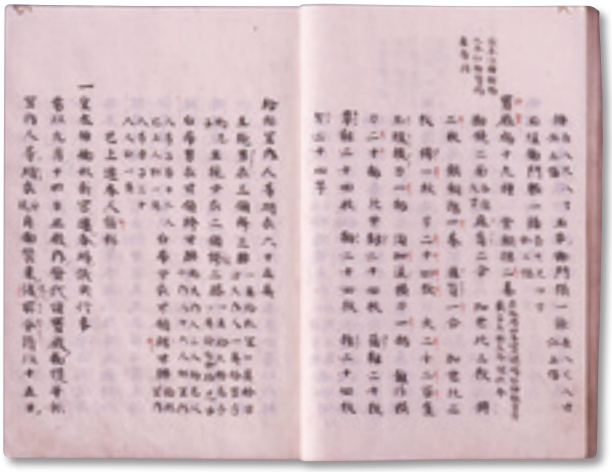
元神宮式年造営庁技師　釆野　武朗

装束神宝奉献の経緯（一）

式年遷宮制度における装束神宝の品目の撰定とそれらを奉献する制度は延暦の『儀式帳』において見ることが出来ますが、その事の実施を示す正史の記録は平安期にまで下ることになります。嘉祥二年（八四九）の『続日本後紀』巻一九、九月七日の条には「左少弁従五位上文屋の朝臣助雄らを遣わして神宝を伊勢太神宮に奉らる　是れ二十年に一度奉る所の例なり」とありこの条文は、同年の九月十六日斎行の皇大神宮第九回式年遷宮に該当するとみられますが、遷宮においては二十年に一度神宝の奉献が行われていて、その事が既にこの時点で恒例となっていたことを示しています。また光孝天皇仁和二年（八八六）の『日本三代実録』九月五日の条には「太神宮神宝を奉らるる使　左大史正六位上　善世宿禰有与史生二人　官掌一人進発　凡そ伊勢太神宮神宝　二十年に一度作り改む」とあり、この記録からこの頃には二十年に一度、装束神宝が作り改められていて、つまり二十年に一度新たな装束神宝が調進されており、さらにそれらが二十年毎に更新されていた事を読み取ることが出来ます。これらの二つの記録での「二十年に一度作り改め、装束神宝の調製を更新し伊勢太神宮に奉献」された品目は、この時から約半世紀遡る延暦二十三年（八〇四）の『皇太神宮儀式帳』『止由気宮儀式帳』に記載のある品目であると見られ、これらのことから式年遷宮制度における装束神宝の奉献品目は、この両儀式帳編纂当時の九世紀の初頭にはある程度の基準となる概形が出来上がっていたと考えられます。

両儀式帳において定められた品目は弘仁十一年（八二〇）弘仁式の施行細則と貞観十三年（八七一）貞観式での弘仁式訂正増補を経て、延長五年（九二七）の『延喜伊勢太神宮式』に集成されることとなります。ここでは奉献される各品目についての詳細な事項が確定され、装束神宝の調製に関する寸法、技法技術、素材を始めとする原則的な仕様が固定化されます。現在の調製規格を形成している現行『仕様書』における技術的な基準となる骨格はその多くをこの延喜式に則っています。

因みに装束神宝の技法技術を規定している現行の調製仕様が、現存する文化財の有する仕様の側面としばしば並び称せられることがありますが、その主な理由はここにその一因を見ることが出来ます。



「儀式帳」記載の神宝条文

神宝館だより 9
八万点ノ国宝収蔵

宗像市大島では大島御嶽山遺跡出土品以外にも祭祀品が発見され、一部は辺津宮で所蔵、展示している。それらのうち『宗像神社史』『沖ノ島』によって来歴が把握できるものを中心に紹介する。

一、銀製指輪と銅製指輪

中津宮の東方台地にあたる井ノ浦川流域で採集。指輪二点とともに滑石製舟形・円板、土師器、須恵器なども発見された。『沖ノ島』によれば、銀製指輪は内径一・七二㎝、厚さ一・二㎜、環高四・五㎜。正面に花形の装飾板を鑞付している。銅製指輪は一部が欠失、内径一・九三㎝、厚さ一・二㎜、環高七～七・四㎜。表面に九段の斜交霰文が陽鋳されている。沖ノ島の国家祭祀では金製指輪が奉献されており、これらの関係性が注目される。

一、滑石製舟形

前述の指輪と採集された舟形として『沖ノ島』では首尾を欠失する一点が把握できる。現在長は七㎝、中央幅二・九㎝、高二㎝。本品のほかに『沖ノ島』で「中津宮付近出土」として掲載の舟形二点がある。両者の関係性は不明。

一、硬玉製丁字頭勾玉

昭和三二年に大島小学校校庭で採集。

一、滑石製子持勾玉

当社所蔵ではないが中津宮境内採集品とされる。かつて誤植により「(宗像市)大井」出土とされ、大場磐雄氏の論考の記述により宗像市登り立遺跡(県立宗像高校付近)と誤認されてきた。近年、花田勝広氏が検証し、明治二一年に中津宮境内から採集した品と確認。大平茂氏の分類で五世紀後葉に比定される。

これらの採集品は、大島で御嶽山山頂以外にも祭祀が行われた可能性を示し、大島での祭祀の展開や、子持勾玉は中津宮境内での祭祀の開始解明の鍵となりえよう。（福）

銀製指輪

銅製指輪

時満ちて道ひらく 造営日記 38

大神宮 仮殿遷座祭

去る十一月十六日、沖津宮末社　大神宮の仮殿遷座祭が神職五名奉仕のもと斎行された。

大神宮の御修復を終えた後、本年度中に沖津宮の御修復に取り掛かる予定である。

第676回　宗像大社歌会詠草

■大西晶子選　■毎月25日〆切

ひつぢ穂は青きかうべを垂れてをり仲秋の月迎ふるゆふべ　佐々木和彦

収穫をされることのない青いひつぢ穂に目を止めた作者。名月の下の哀愁。

オスプレイ基地照らすは仲秋名月寂し民の反対　秋吉　嘉範

住民に共感する作者か。〈住民の反対をよそに仲秋の月は照らせりオスプレイ基地〉。

梅の木でつくつく法師鳴き終えてチッと声かけ西へ飛び去る　萩原　勉

西方浄土を思わせる結句が良い。〈鳴き終えしつくつく法師木の幹でヂッと声たて〜〉。

死に至る哀へ知らず曾孫六人吾れ米寿も諾ひてをり　豊田ミツ子

米寿の幸せな作者。〈曾孫六人得てわれ米寿を迎えたり死に至るほどの衰へも無く〉。

背を正に足もなるだけ伸ばし寝る呪文となるやさあさ眠ろう　山本　静子

就寝儀式の歌。〈背を正し足もなるだけ伸ばし寝る「さあさ眠ろう」呪文となえて〉。

高宮にうごく藪蚊も鴉らも世界遺産の顔になりゆく　山﨑　公俊

一読し笑ってしまった。世界遺産に住む蚊や鴉も風格を持つとユーモアたっぷり。

国やぶれ子づれ引揚げなすちから今につづきて百歳の母　北野カズミ

力強く生きた百歳の母がすばらしい。初句から〈敗戦時子を連れ引き揚げせし〜〉と。

道ばたに空地に白き野の花のごとく菲の花咲きひろがりぬ　吉崎美沙子

目立たない韮の花を愛でる作者。韮は鑑賞用ではないので野の花の比喩は再考を。

敬老の祝ひに集ひし面々の表情明るく膳を前に座す　森　龍子

敬老の日のお祝い会の明るさが良い。結句は〈膳に着きをり〉くらいで良い。

雨上がりすそ野に雲のベール巻き青き福智は秋の貴婦人　本田エリナ

絵画的に詠まれた福地山がロマンチックで美しい。四句は字余りでも福地山と入れて。

御座船を守りて進む船団の大漁旗が潮風に舞う　杉田　禮子

みあれ祭の景。メリハリをつけ〈大漁旗ひるがえしつつ進みゆく御座船守る漁船の船団〉。

草むらに細ぼそと鳴くこほろぎの声を聞きつつ電車待ちおり　大和美由紀

晩秋らしい季節感のある一首。四句〈〜聞きをり電車待ちつつ〉としたい。

◆**選者詠**

うらおもて見せつつ散るにまだ早し葉いろ多彩な南京櫨は

寄せかへす玄界の浪の置手紙なぎさに散りぼふしろき貝殻

御造営奉賛者御芳名

（平成二十九年十月）
（順不同・敬称略）

一、〇〇〇、〇〇〇円
京都市　千　宗左

五〇、〇〇〇円
静岡市　加藤よし江
比企郡　野口　本和
福岡市　中野　眞
福岡市　中野　芳子

三〇、〇〇〇円
熊本市　佐藤　拓司
宗像市　中野　順
宗像市　集　栄堂
横浜市　大和田全彦

二〇、〇〇〇円
福津市　今丸　滇

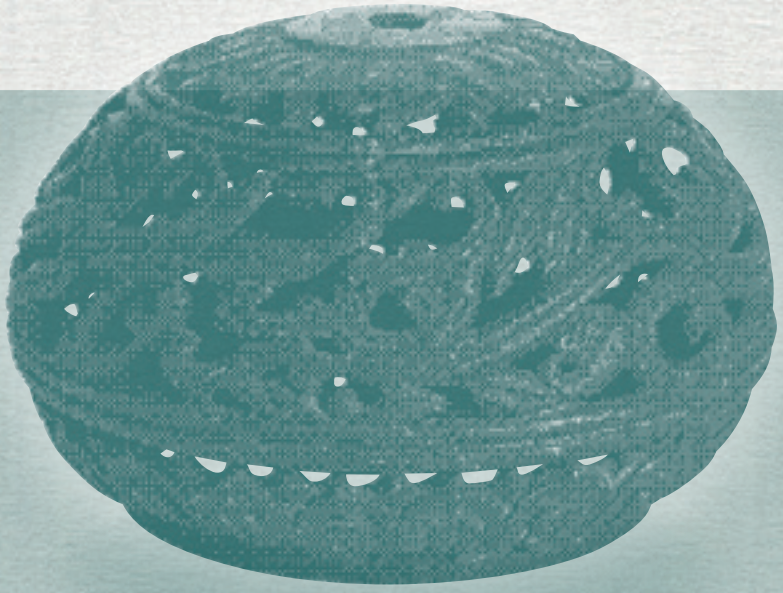
一〇、〇〇〇円
金沢市　梶谷　晋弘
金沢市　藤田戦略研究会
川崎市　片山　雄介
久留米市　緒方　翔馬
豊中市　西村　将彦
福岡市　野村　喜秋・美由紀
福岡市　栗原　秀利
宗像市　松浦　朋子

五、〇〇〇円
明石市　福崎　剛
朝倉市　矢野　宙之
朝倉市　三浦　起幹
足立区　俵　澄江
飯塚市　内田　幸洋
糸島市　原田　和也
大牟田市　後藤八重子
大牟田市　後藤　勝義
鹿島市　髙木美和子
春日部市　副島　高令
葛飾区　大山　博之
北九州市　小林　静夫
北九州市　加藤　昌和
北九州市　嘉茂　真人
佐世保市　松瀬　敏章
品川区　原田　秀美
渋谷区　新保　健介
世田谷区　岩下　麻里
鳥栖市　久原　大介
豊中市　森　仁
長浜市　前川　重子
練馬区　岩渕　敬三
阪南市　山中富士夫
広島市　木村　路子
広島市　木村　幸子
福岡市　西山　倫代
福岡市　橋村　嗣彦
福岡市　奥　三雅子
松阪市　地主久美子
三鷹市　富樫　亜純
横浜市　大成　克弘
輪島市　八井　汎親

三、〇〇〇円
大阪市　福地　昭義
春日市　進　まゆみ
春日市　野村　光輝
北九州市　溝田　武子

二、〇〇〇円
阿蘇郡　本田　幸則
阿蘇市　林　秀峰
糸島市　髙木　長道
宇部市　松永恵美子
大分市　中野　惠子
遠賀郡　宮川津由子
遠賀郡　松永　文孝
嘉穂郡　吉貝　浩美
熊本市　本田　和寿
江東区　本村奈津紀
神戸市　坂東　大輔
佐世保市　片岡　聡
渋谷区　柳澤　和香
多摩市　加藤　里実
筑紫野市　野村　利孝
名古屋市　鬼頭　雅和
東久留米市　齋藤　龍平
福岡市　今村　裕幸
福岡市　今村　光秀
福岡市　小川　雅弘
福津市　辻　勝政
三島郡　原　秀雄
行橋市　原口　七重

むなかた　師走　第682号
2017年12月1日発行(月刊)／宗像大社　〒811―3505　福岡県宗像市田島2331　電話(0940)62―1311(代)　http://www.munakata-taisha.or.jp/



編集後記

気づけばもう師走▼この一年、「宗像」にとって、歴史・記憶に残る年であった。七月には世界文化遺産登録。先人たちより受け継いだ信仰・文化・歴史を守り続けてきた地元の努力が実った瞬間であった。そして十月には全国豊かな海づくり大会福岡大会が宗像で開催され、有史以来、初めて天皇皇后両陛下のご参拝を賜った。総務・広報課として、様々な場面に携わり、また神主として二度とない経験ができた▼激動の一年を振り返り新しい年への思いを巡らせつつ、正月を迎える準備を進めたい▼残り一カ月皆様お体に気を付けてお過ごしください。そして来年も社報「むなかた」をよろしくお願いします。(黒)

12月 まつりごよみ

1 日	総社月次祭 引続き　高宮祭、第二宮第三宮祭 宗像護国神社祭	午前11時
15日	総社月次祭 引続き　高宮祭、第二宮第三宮祭	午前11時
17日	古式祭 御座 鎮火祭	午前 6 時 午前 6 時30分 午前10時
19日	松尾神社祭	午前11時
23日	天長祭	午前11時
31日	大祓式 引続き　除夜祭	午後 3 時

宗像大社